

辺野古の基地建設計画は、1996年のSACO(沖縄に関する特別行動委員会)最終報告の中で、沖縄宜野湾市にある普天間基地を返還する代わりに代替基地として建設計画が持ち上がりました。現在は、事実上の基地建設着工である「ボーリング調査」が日本政府、那覇防衛施設局によって進められようとしており、それを止めるために、住民による座り込みと海上での阻止行動が連日のように繰り返されています。



署名提出

1月20日の署名提出行動の様子。辺野古のボーリング調査の即時中止と基地建設の白紙撤回を求める2700筆の署名を大阪防衛施設局広報官に手渡しました。



街頭アピール

署名提出行動当日には、35名の方の参加がありました。行動終了後には街頭に出て、キャンドルアピールを行いました。



差し止め訴訟

12月27日、ボーリング調査に反対する市民や近隣地域の海人ら68人が原告となり、国を相手にボーリング調査の差し止めを求める訴訟を那覇地裁に起こしました。

今しかない!全国から辺野古・基地建設反対の声を!

那覇防衛施設局が辺野古の海底を掘削する「ボーリング」のための足場設置に着手した11月以降、今にも掘削作業が開始されるかも知れないという緊迫した状況の中で約3ヶ月が経とうとしています。今もまだ海底には1本の杭も打たせていません。なぜなら、国頭、東、宜野座、金武、石川の海人(漁民)有志が立ち上がり、住民たちと一緒に単管足場(水深4m未満の海底を掘削するためのやぐら)に張り付くことで、施設局の作業を完全にストップさせるという状況を作り出しているからです。そんな中、ボーリングはおろか、やぐらに指一本さえ触れることができない施設局の一日の作業といえば、写真撮影や安全灯の電池交換などに終始せざるを得ない状況です。この状況が1ヶ月近く続き、ついにしびれを切らした施設局は、1月13日、スパット台船(水深4m以上25m未満の海底を掘削するための巨大な台船)を積

んだクレーン船を再び辺野古沖に回航させました。しかし、海人も含めた住民の必死の海上行動により、施設局はスパット台船を海底に降ろすことができず、作業を止めて引き返していったのです。この日の出来事は、辺野古で座り込み、海上で阻止行動を続けてきた人々の大きな自信となり、喜びとなりました。

しかし、今後、施設局がさらに強行に出てくることは間違いありません。それをさせないためには、何よりも全国の監視の目と、基地建設を絶対に許さないという世論の高まりが必要です。さらに、辺野古現地の闘いを支える船のチャーターカンパも必要です。みなさん、辺野古で一日一日積み上げられていく勝利を追い風にして、さらに大きな声をあげていきましょう。この計画は絶対に白紙撤回できます。頑張りましょう!(松本)



スパット台船

スパット台船を積んだクレーン船と、その航行を止めようとして何度も前に割って入る小型船。ついには、クレーンでスパット台船を吊り上げ、降ろそうとしている場所に陣取り、スパット台船を設置させなかった。



海人

辺野古の海を守るために駆けつけている国頭、東、金武、宜野座、石川の海人たち。

●那覇



単管足場

リーフ内の4箇所建てられている単管足場には、ウエットスーツを着込んだ4~5名の人が上り、その四方には海人の船がびっしり張り付いて、施設局の作業を止めています。

サイレント

毎週土曜日の夕方には「サイレントキャンドル」と銘打って、キャンプ・シュワブの米兵たちに「辺野古の海とジュゴンを守ろう」と静かに訴える行動が行われています。



作業船

施設局がチャーターしている漁船。操船する漁民、施設局員、作業員が乗っています。